埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

〈事例報告〉
保育者・小学校教員養成校におけるオンラインによる弾き歌い指導

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): online lesson, singing and playing, remote lecture 作成者: 宮崎, 真利子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1364

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

事例報告

保育者・小学校教員養成校における オンラインによる弾き歌い指導

Online Singing and Playing Lessons in Nursery and Elementary School Teacher Training Courses

宮　崎　真利子
MIYAZAKI, Mariko

１．はじめに

今年度は、コロナ禍で多くの大学が「オンライン授業元年」となった。とりわけ、ピアノ演奏や弾き歌いを行う、実技を中心とした授業では、前例のないオンライン上での授業形態に、教員も学生も戸惑ったのではないだろうか。特に、保育者・小学校教員養成校では、音楽大学の学生のように、全ての学生が自宅に鍵盤楽器を所持している訳ではなく、自宅のインターネット環境にも差異がある。それでは、全ての学生が平等に学習できるためには、どのようにオンライン授業を展開すればよいだろうか。本稿では、本学閉鎖期間中であった2020年５月７日から６月18日にかけて行われた､「子どもの歌と伴奏法Ⅰ」の６回にわたるオンライン授業の実践から、オンライン授業におけるピアノの弾き歌い指導について考察する。なお、オンライン授業は、主にTEAMS [1] で行った。

２．オンライン授業での指導・学習方法

これまでの対面授業での指導内容を鑑みながら、オンライン上での授業展開を述べる。

2.1. 履修者のこれまでの音楽の学習歴と対面授業時の授業内容

「子どもの歌と伴奏法Ⅰ」の殆どの履修者が本学２年生であり、１年次に「音楽実技Ⅰ,Ⅱ」を履修している。「音楽実技Ⅰ,Ⅱ」では、音楽理論や音楽の基礎知識を身につけながら、保育者・小学校教諭に必要なピアノの技術やコードネームによる弾き歌いを学ぶ。翌年度の「子どもの歌と伴奏法Ⅰ」では、保育や教育現場で使われている歌を使って、弾き歌いを学ぶ。つまり、既に「音楽実技Ⅰ,Ⅱ」の履修を終え、自宅にテキストと鍵盤楽器があれば、この授業において自主的に弾き歌いの学習をすることは可能なのである。

しかし、例年の履修者の学習状況や「音楽実技」での初級者の成績などを鑑みると、ピアノを始めて１年程度では、自力で楽譜を読み、ピアノを弾くことが困難な学生が少なからずいるのが実情である。また、ピアノのレベルが中級以上であっても、適切な曲の選び方や、学生自身で選曲した曲の指使いがわからず、自主的に学習に取り組むことができない学生もいる。従来はそれらの問題を、対面授業で解決してきた。

通常の対面授業では、全履修者を半分のグループに分けて、音楽室で課題曲を用いてコードネームを学ぶ「クラス全体授業」と、個人レッスン室で弾き歌いの個別指導を受ける「個人レッスン」を行なっている。つまり、履修者は、１つの授業内で二つの形態の指導を受けているのである。定期的に対面で授業やレッスンを受講することによって、個々の演奏上の問題点を明らかにし、自宅や学校で個人練習

キーワード：オンラインレッスン、弾き歌い、遠隔授業
Key words ：online lesson, singing and playing, remote lecture

をしながら、ピアノや弾き歌いの技術を向上させてきた。そのため、オンライン授業では、対面時と同じような質の授業にどこまで近づくことができるかが、課題となった。

2.2. 自宅の学習環境

本学では、オンライン授業開始時に、TEAMS上に提示された資料を読んで学習する、自己学習型や課題提出型での授業形態を中心に進めることが推奨されていた。これは、学生の自宅でのインターネット環境が異なるため、初回から動画を中心に授業を展開すると、すべての学生が公平に講義を受けられなくなる可能性があるからである。動画視聴によるオンデマンド型の授業や、TEAMSやZOOM[2)]のビデオ通話を利用した同時双方向型の授業は、全履修者のネット環境が安定していることが確認できた上で、行うことができた。

実技中心の授業において、対面授業により近い形で行うためには、オンデマンド型や同時双方向型が適していると考え、第１回目の授業時に、履修者にインターネット環境と鍵盤楽器の所有状況に関する調査を行った。この調査では、59名から回答を得た。まず､オンライン授業での使用機器は､スマートフォンとタブレット端末が全体の54％、パソコンが46％であった。「動画や音楽をインターネットの通信制限なく見ることができるか」という質問には、76％の学生が問題なく見ることが出来ると回答し、残りの24％の学生は、通信制限はあるものの、１日に５分以内の動画は視聴することが可能と回答した。この調査結果から、５分以内の動画の配信によるオンデマンド型の授業は可能であると判断したが、授業を円滑に行うためには、通信テストを行いながら、慎重に導入を検討する必要があると考えた。

また、電子ピアノやキーボードを含む鍵盤楽器の所持状況については、全履修者のうち８名が鍵盤楽器を所有していなかった。そのため、鍵盤の所持をしていない学生に、どのように指導するかが、早急の課題となった。

上記の調査に加えて、自由回答でオンライン授業に関する要望を聞いた。「オンライン授業全てにおいて不安」､「直接個人レッスンを受けることができない」､「動画だとついていけるか不安」といった声が上がった。この結果を踏まえて、まずはオンライン授業への不安を取り除くことが先決だと考えた。

2.3. 鍵盤楽器を所持していない学生への対応

まず、鍵盤楽器を所持していない学生には、紙製の鍵盤を配布し、印刷、作成するように指示した。紙鍵盤は、鍵盤の長さや太さが実物大に近く、家庭用のプリンターでA4サイズの用紙で印刷できるものを作成した。用紙１枚につき１オクターブの鍵盤が印刷できる仕様で、複数枚の紙鍵盤を繋げると、両手で演奏できるようになるものである。

紙鍵盤での演奏は、鍵盤の位置を確認する用途には役立った一方で、鍵盤の立体的な感覚を掴むことができず、正しい音を弾けているのかが、自分で確認できないといった意見があった。そこで、音の確認については、スマートフォンで鍵盤アプリを導入するように促し、紙鍵盤と併用して使用するように勧めた。鍵盤楽器の代用として、鍵盤アプリを使用すると、鍵盤が非常に細く、実際の鍵盤楽器とはかけ離れた感覚となるため、あくまで音の確認をするために使用してもらった。そして、紙鍵盤を使う学生に対する個人指導は、歌唱の指導を中心とし、伴奏部分はリズム打ちをして学習するように指示した。

2.4. オンライン個人面談

次に、学生のオンライン授業への不安を取り除くために、第２回目の授業時に、個人レッスン担当教員から担当学生へ直接通話で連絡を取り、オンライン上の面談を行うことにした。第１回目の授業段階で、個人レッスン担当教員と学生間で、メールでのやり取りは既に行なっている状況であった。しかし、中にはメールの使い方がわからずに、連絡が取れなかった学生や、メールでの連絡のみでは不安に思う学生もいた。そのため､TEAMSの通話機能やチャット機能などを使って、直接教員と肉声で面談ができる時間を設ける必要があると考えた。この面談で、履修者全員のオンライン上での通話ができることが確認できれば、同時双方向型の授業を展開することが可能になる。

複数の個人レッスン担当教員が手分けして通話確

認を行ったこともあり、授業時間内にほとんどの履修者との通話確認ができた。オンライン面談では、メールのやりとりだけでは相談しづらかった、選曲の相談や、オンライン授業への不安を直接聞き出すことが出来た。

この時期は、緊急事態宣言の解除が出始めていた。６月初旬から対面授業を始める見通しもあったため、同時双方向型の授業については、５月末まで開始を見送ることにした。

2.5. 課題提出型の授業

初回の学習環境調査結果から、まずは課題提出型の授業を行うことにした。第１回目は、本学のオンライン授業初日でもあったため、「TEAMSに提示された資料を読み、課題を提出することができるのか」という、試みから始まった。提示された読譜課題をTEAMS上からダウンロードし、解答を個人レッスンの担当教員にメールで提出するよう指示した。学生だけでなく、教員もTEAMSを使い始めたばかりの状況であったため、まずはTEAMSの機能を使わず、メールで学生から担当教員に連絡を取る形に統一した。課題のダウンロードができなかった学生は、TEAMS上で課題を確認し、直接メール本文に解答を記入する形にした。全体的に初回の課題提出率は高く、期限内に提出している履修者が多かった。

第２回目、３回目は、読譜課題をオンライン上で自己採点できる仕様に変更した。満点を取るまで何度も問題を解いた学生もいたが、設問数が多かったため、初回に比べると解答者数が減少した。そのため、第３回目は問題数を減らして出題した。

読譜課題に加えて、鍵盤楽器がなくても学習できる課題を出した。第２回目は、発声練習や歌唱法についての資料を読み、発声練習をした所感を、担当教員に提出する課題を出した。対面授業時では、クラス全体で発声の授業を行っているが、課題提出型の授業では、各自で資料を読みながら取り組まなければならなかった。課題を行った学生からは、「口を大きく開けると声の通り道が広がった」、「普段意識できない身体の部分を感じながら歌うことができた」など、実際に発声練習をした上での感想を聞くことができた。一方、他の課題提出を終えていても、この課題のみ最後まで提出しなかった学生も何名かいた。

第３回目では、指使いに関する資料を配布し、「大きな栗の木の下で」に各自が指番号をつけ、担当教員に提出させた。指使いに関する資料は、なるべく文字での説明を簡潔にし、図を載せ、フォントも大きくして、見やすくした。

添削をしてみると、ピアノが苦手な学生ほど、非効率的な指使いをしている傾向があった。対面レッスン中は、弾きやすい指使いになるように、教員が指番号をつけていることもあるが、卒業後は自分で指使いを考えることもあるだろう。この課題はその予行演習として、役立ったのではないだろうか。

2.6. オンデマンド型の授業

対面時の「クラス全体授業」では、履修者全員が共通の課題曲を学習している。対面授業に戻った際に、各自課題曲の予習が出来ているように、演奏解説動画をTEAMS上に提示した。学生が各自で動画を視聴し、自宅で練習してもらうことにした。

この学習形態も通信テストを経て始めていった。３回目の授業時に、「大きな栗の木の下で」の両手奏の動画を45秒間視聴してもらい、動画の視聴状況のアンケート調査を行った。アンケートによれば、「動画を止まることなく見ることができた」が75％、「時々止まることがあったがストレスなく見ることができた」が９％、「何度試しても見ることができなかった」が６％だった。不具合のあった学生には別の方法で動画視聴を試したところ、全ての学生が視聴することができた。カメラは鍵盤に近づけ、なるべく指の動きがわかるように撮影した。どのレベルの学生にも理解できるように、テンポも遅めに設定して演奏した。

「鍵盤や指の動きはわかりやすかったか」という質問には、ほとんどの学生が「わかりやすかった」と回答した。「左手のみの演奏は必要か」という質問には、「なくても良い」が56％ではあったが、44％が「あった方が良い」と回答していたため、左手の動画を加えることにした。その他の要望として、「もう少し上から映してほしい」や「解説をつけて欲しい」といった意見があったため、それらの要望を取

り入れながら、第４回目の課題動画を作成した。解説動画は５分以内に収めた。

４回目は前回提示した課題、「大きな栗の木の下で」の指番号の付け方を動画で解説した。そして新たに、「めだかの学校」の両手弾き歌いと、右手、左手のみの動画をTEAMS上で提示した。この段階で、６月中旬までオンライン授業を続行することが決定したため、５回目に、「かたつむり」、６回目に「こいのぼり」を対面授業までの参考資料動画として、同様の方法で提示した。５回目以降は、同時双方向型による個人レッスンが開始したため、動画再生回数は10回程度と、３回目の授業時より大幅に減少した。

2.7. 同時双方向型の授業

対面授業の再開が６月中旬になることが決まり、６月以降の５、６回目はTEAMSの通話機能を使った同時双方向型の授業を開始した。対面時のレッスン時間は３～４人のグループで45分だが、同時双方向型では、一人当たり15分前後の個人レッスンを行い、残った時間でオンデマンド型の学習を行ってもらう形にした。

１回目は同時双方向型のレッスンに慣れない学生も多く、ビデオ通話の設定や鍵盤楽器を映す作業でレッスン時間の半分程度の時間を費やしてしまい、なかなか思うようにレッスンが進まず、弾きにくい箇所の質問や選曲の相談を受けることに終始した。鍵盤楽器のない学生は、歌を歌い、伴奏部分をリズム打ちしてもらった。

中には、家族が自宅でテレワークをしているため、授業中に音を出すことができないといった個人的な事情で、レッスンを行えない学生もいた。その場合は、自分で弾き歌いを撮影した動画を後日提出してもらう形をとった。

２回のみのオンラインレッスンだったため、対面時のようにスムーズに進まなかったが、練習の仕方がわからない学生や、選曲を自分で行えない学生にとっては、有意義な時間になったのではないだろうか。７回目以降は対面授業になり、感染対策をしながら授業やレッスンを行った。

３．オンライン授業を終えてのアンケート

本講座の最終授業時に、オンライン授業に関するアンケートを行った。このアンケートでは、56名から回答を得た。

3.1. 課題について

まず、初回から３回目にかけて提示した読譜課題について、「読譜課題はその後の学習に役立ったか？」という質問について、約７割の学生は「役立った」と回答しているが、約３割は「わからない」「あまり役に立たなかった」と回答した（**図１**）。

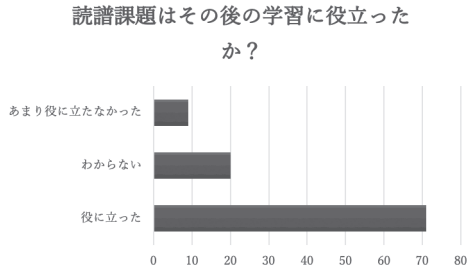

図１

この回答から、楽譜の音名やリズム、コードネームを答えることが、必ずしも実際の演奏に繋がるわけではない、と感じている学生が少なからずいることが見えてくる。

次に、「歌唱や指使いの資料は分かりやすかったか？」という質問には、89％の学生が「大変わかりやすかった」、「わかりやすかった」と回答した。

「わかりにくかった」と回答した理由として、「実践しても合っているのかわからない」（３人）、「文字が小さくて読みづらい」（２人）、「説明が難しい」（１人）という声が上がった。少数意見ではあったが、学生が自主的に学習できるように、教員側が資料を読みやすく、わかりやすくするように心がける必要がある。

3.2. 動画視聴について

演奏解説動画については、自己学習をする上で役立っていたのだろうか。「演奏解説動画はわかりやすかったか？」の質問に、「大変わかりやすかった」と「わかりやすかった」を合わせて、93％が回答し

た（**図２**）。

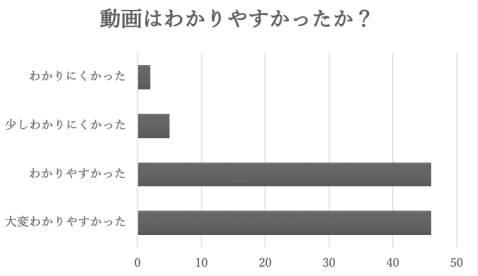

図２

「少し分かりにくかった」､「分かりにくかった」と答えた理由として､「動画を快適に見ることができなかった」（３人）､「解説がわかりにくかった」（２人）と回答している。動画は度々システム側の不具合があり、別の視聴方法を提示していたが、その提示を見つけられなかった学生もいたようである。

次に､「動画を見てからいつ練習したか」という質問には、半数が「当日中」と答え、４割近くが「翌日以降」に練習したと回答した（**図３**）。

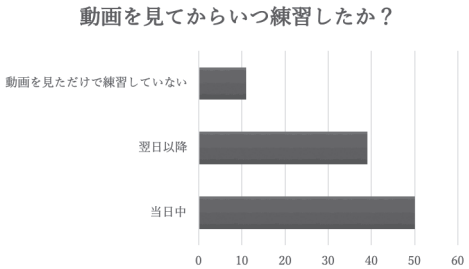

図３

５回目以降の視聴回数が低下していたため、動画を見ただけで練習していない学生の方が多いと予想していたが、予想以上に多くの学生が対面授業への予習として動画を視聴し、練習していたことが明らかになった。

3.3. 同時双方向型のレッスンについて

同時双方向型の個人レッスンに移行する際、練習意欲に変化はあったか、という質問には、６割近くが「練習意欲が湧いた」と回答した（**図４**）。この結果から、課題提出型や、オンデマンド型の一方通行の授業だけでは、学生の練習するモチベーションが上がらず、教員とのコミュニケーションが練習意欲へ繋がっている様子が見えてくる。

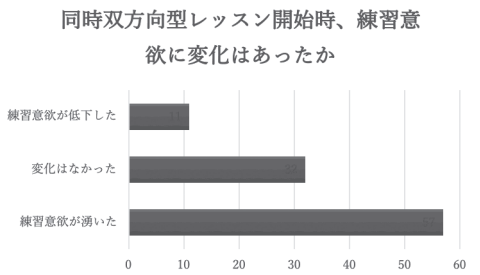

図４

４．まとめ

本講座は、既に音楽理論を学び、ピアノの経験もある本学２年生が中心であったため、比較的スムーズに授業を始めることができた。しかし、本来実技が中心の授業のため、多くの学生が、従来とは異なる授業形態に不安や不満を感じていた。

大学閉鎖期間中、本講座では６回にわたり、課題提出型、オンデマンド型、同時双方向型と、３つの方法で授業を展開した。各々の学習環境の違いもあり、履修者全員が６回の授業に満足することはできなかったであろう。特に課題提出型や、オンデマンド型の授業では、約半数の学生がスマートフォンで学習しているため、それに十分に対応した授業展開ができたとは言い切れない。その後、同時双方向型に移行すると、TEAMS上の課題提示だけではなかなか課題に取り組めなかった学生も、教員と学生のコミュニケーションにより、意欲的に課題に取り組めるようになった。また、文字だけでは伝わりづらい問題も、TEAMSの通話で容易に解決したことも多かった。

今年度は、従来の対面授業に近い形に沿ってオンライン授業を展開した。しかし、今回を機に、今後はあらゆる場所で、オンライン授業独自の、新しい授業形態も生まれてくるだろう。保育者・小学校教員養成校においても、従来の形態に固執せず、新しい方法を取り入れながら授業展開していくことが、今後求められていくのではないだろうか。

注

1）マイクロソフト社が開発したチャットツール

2）ズームビデオコミュニケーションズ社が開発したウェブ会議ツール